

疎開と食糧難のこと

●阿佐谷北四丁目

土屋 敏子

(昭和八年生まれ)

私は杉並区阿佐谷で昭和八年に生まれ、現在も住んでおります。疎開での事は今から四七年も昔の事で、記憶も大分風化しておりますが、富津学園での事は一生忘れる事が出来ません。

私が小学校五年生の時：当時、小学校は杉並第九国民学校といいました。学校の先生から千葉県に都立富津学園という学園があって、希望者を疎開させるという事でした。

学園は千葉県君津郡富津町にあり、きれいな海辺で緑こい松林に囲まれた静かな環境の良いところで、部屋五〜六名で大浴場完備、快適に生活が出来る等々……。

私は一〇歳の時母と死別しているの、幼い五歳の弟、そして生後六か月の弟たちの面倒や家事の手伝等から少しは解放されると思い、先生からの話を聞いて即、入園希望を申し出ました。

富津学園というのは、杉並区立小学校全学校の三年生〜五年生までの希望者を集めた杉並区第一弾の集団疎開組でした。全員で約一五〇〜一六〇名位だったと思います。

さて喜び勇んで学園に着いたところ、私の学園のイメージとはまるで違っておりました。たしかに海のそばで環境は良いのですが、古い校舎、三教室、その部屋に畳が敷いてあり、一教室五〇名以上が詰め込まれ、そこで寝起きするのです。起きるとそこが教室に早替わり。先生一人で三年・四年・五年生をみるのです。分場のようなものです。

学園の玄関そして大浴場には、カボチャの山が私達を歓迎してくれビックリ。大浴場の浴槽の中までカボチャだらけ。風呂場にはカランがついていても水は出ない、だからお風呂は使用出来ず、近くのお寺へお風呂に入りに行きました。近くといっても歩いて一〇分位かかります。児童一五〇名以上もいますから一度に入るわけに行かず、一〇日か半月に一度位だったと思います。

洗濯にいたっては子供が洗うのだから、どの程度で洗濯したのか、記憶にありません。今考えて見ると何と不潔な生活だった事かとゾッとします。

ですから髪の毛に「シラミ」がたかり、衣類にも「シラミ」

がわき、からだ全体が「シラミ」の住みかだったのです。髪の毛を友達同士で見ると「シラミ」が動き廻るのが良く見え、髪の毛一本、一本に「シラミ」の卵が数珠なりについているのです。

夏になるとシラミや蚊等の媒介で、子供たちの大多数が皮膚病になやまされ、だからといって病院に通うわけではなく、ただ赤チン等の薬をつけるだけでした。

冬になると八〇帖ほどある大部屋で、暖房といったら一帖のイロリにかまどの残火を少し入れるだけだからすぐに消えてしまい、皆素足だからヒビ割、アカギレ、しもやけでなやみました。しもやけがくずれて足に出来、歩く事が出来ず、布団にくるまって何日も泣いて過ごした事もありました。

入園したのが昭和一九年六月ごろだったと思います。二、三か月位してだんだんと食糧事情が悪く、くる日もくる日もカボチャの御飯にカボチャのおかず、からだ全体黄色くなつて行くようでした。

そんなある日、土地のBさんという網元の人が、土地の子供たちを大勢連れて学園の子供たちと交流させようとなりました。ところが土地っ子は広い学園の庭を飛び廻るのに対し、学園の子供は木陰でじっとして動かない。それを見たBさんは「学園の子は栄養不足だ」といって、新鮮な魚をたくさん差し入れて下さった事も思い出です。

食糧といえばカボチャとすいとん。すいとんといっても、今のように美味しいだしのすいとんと違い、だしのないスー

プにうどん粉のオダンゴが七つの割当。育ち盛りの子供たちは、そのスイトンを配るのを多いの少ないのと真剣に見つめるのです。常に空腹でしたから、家族へ手紙を出す時は、手紙の終わりの方に非常食を送って下さい…と必ず書きました。いろいろ送ってもらうにも検査等があるので、イリ豆とかイリ米など、お手玉などに入れて送ってもらい、中身を食べたら今度空袋へ砂を入れて遊んだものでした。

そんな中で、楽しい思い出も有ります。富津岬から舟で横須賀へ遠足に行きました。「軍艦三笠」を見学に行った思い出もあります。

その後、戦争もだんだんはげしくなり、東京湾に米軍が上陸するとのデマが飛び、富津に疎開していた仲間が一人、二人と富津を離れて行き、私も長野県の親戚の家に引き取られることになりました。長野の家は非農家で母子家庭であり、今のように福祉国家でないから富津以上に食糧難です。農家の手伝いや子守等して少しの駄賃をもらったものでした。

終戦を迎え東京にもどると、千葉より長野、長野より東京とますます私には食糧事情が悪くなる一方でした。口に入るものは全て食べました。「おから」「ふすま」「コーリヤン」「トウモロコシ」「雑草」「カボチャの種」家畜のエサ以下のものです。「おから」「ふすま」に小麦粉を一割ほど混ぜてパンを作り、食べるのだけれど、いくら空腹でもさすがにのどを通らず、水と一緒にのみ込んで無理に胃袋へ送り込むのです。

また、こんな事もありました。食糧を買い出しに行くので

すが、我が家は貧乏なので、物物交換する品もない、そんな中でほんの少しのお金を持ち農家に行き、「食べられる物少しゆずって下さい」と言々と、「そんなに食べる物ほしけりや自分で作れ」と押し返され、投石された事もありました。また他でわけてくれた甘藷かんしょが種芋で、煮ても焼いても堅くて食べられなかった事もありました。「貧乏人は麦を食え」「働かざる者食うべからず」そんな時代でした。

今の日本といえば、グルメ嗜好とかいって、食事をして食べ残すし捨ててしまう。いつから消費が美德になったのだろうか？ 私たちの年代では考えられない。本当にもつたいな位と思います。私たちの貴い体験を後世の人たちに伝え、一人一人が努力し協力して現在の幸福をいつまでも持続出来るように、無駄をはぶき地球を大切に守りたいと願っております。

都立富津戦時疎開学園設置要綱

- 一、名 稱 東京都立富津戦時疎開学園ト稱ス
- 二、設置場所 千葉縣君津郡富津町大字篠部八三九番地（杉並區富津臨海學寮内 總武線大貫驛下車）
- 三、開設期間 昭和十九年六月中旬ヨリ昭和二十年三月三十一日
- 四、目 的 非疎開地區ニ疎開ヲ希望スル杉並區内國民學校児童ヲ收容シテ國民學校教育ヲ實施スルト共ニ合宿ニ依リ師弟同行行學一體ノ鍊成ヲ行フヲ以テ目的トス

△杉並區教育史「下巻」より抜粋△

集団疎開の事

昭和二〇年三月一〇日の東京下町の大空襲の後、最後の学童集団疎開生として、五月四日、当時国民学校六年生の私と、四年生の弟は、長野県小県郡長村真田^{おき}へ向かった。父や母たちは、生きてまた逢えるかどうか解からない状況の中で、笑顔で送ってくれたと思う。私たちは遠足にでも行くように喜々として、汽車に乗り込んだ。小さな旅館で、一〇人位ずつ男女別々の部屋に寝泊りして、夜は虱^{しらみ}や蚤^{のみ}に悩まされたり、生まれて初めてまきを背負って運んだり、川でセリを摘んだり、サツマイモの床いもを食べたり、歯磨粉や胃腸薬を、お菓子代わりに食べた事もある。ほんとうにひもじかった。

八月一日正午に大事な放送があるというので、全員食堂へ集まってラジオを聴いた。雑音がひどくて、何だか解からなかったけれども、大の男の寮長先生がわあ〜泣きながら「日本は負けた」と言われたので、ただもうびっくりしてしまっただ。

その時、私は内心「これで家に帰れるかもしれない」と思った。

一月一二日の朝だったと思う。杉並区役所の前で解散し、霜柱の立つ道を、それ〜の家へ無事帰って行った。あのおもいは、子孫にさせてはならないと思う。戦争絶対反対。

●善福寺四丁目

畑野 玲子

(昭和八年生まれ)



太平洋戦争下の疎開

●下高井戸二丁目

村木 サワ

(大正三年生まれ)

昭和二〇年、戦争もいよいよ激しくなりまして、東京から女子供は疎開するよう指令がありました。私たちも該当者でありますので、仙台の在ざい、古川町という所に行きました。男の子三人五歳、四歳、二歳の幼い子供を連れて、泣き泣き家を離れました。

その町は下高井戸と余り変わらない所でしたが、近隣に農家がありまして、毎日子供二人を連れ一人を背おって、食料の買い出しに行きました。私はその時妊娠をしていましたが、力も強く、普段と変わりなく何でもいたしましたが、ただ気持ちの変化も甚しく、すぐに泣いたり、東京の家が恋しくなり、めそめそしていました。が、また気を取り直して、国のためだ、子供のためだ、と思い直して張り切って頑張り通しました。

毎日一回は古川の駅に行き、東京の家が焼ければ皆こちらに来る。そしたら一緒に暮せる。そんな事ばかり思いつつ、ああ今日も駄目だ、あしたも駄目だ、といいながら疎開の家に戻りました。子供も約一キロ歩きますので、どんなにかつ

かれたと思いつつ、三人の子供をだきしめて慰めて泣きました。

私もが疎開しますと同時に空襲が東北地方にうつり、仙台が燃えて、今度はどこかと心配しましたが、幸に他は敵機の空襲にも遭いませんでした。

その時私は考えていました。こんな苦勞をするのならどんな事でも出来る。何でこんな所に来たんだろうとつくづく思いましたが、疎開先の皆さんがとても良い人だったので、皆さんに励まされ、慰められて我慢しておりました。今は故人となられました人が大勢おりますが、感謝して、時折瞑想にふけております。でも今度、私が生きてるうちは戦争はないと思います。例えどんなことがあっても家族別々に疎開等はいたしません。今でもあのころの悲しかった事や困った事を考えますと、身の毛のよだつ思いです。

でも人間、非常事態になって、初めて人の温さを知り、また自分で出来る事がありました。何でもお手伝して人のため、ひいては我が身のために尽くそうとつくづく考えました。

そして終戦になりました。八月三〇日マッカーサーが、厚木基地についた日、東京の家から姑と義妹が迎えに来てくれました。

早く東京に入らないと米の配給、又は他の物が貰えなくなると言われて、急いで帰りました。でも汽車の切符は手に入らず、身重の私が汽車の窓から出入りするような時でしたが、必死の思いで、普通では帰れないところを、松島の連隊に上位の人を知っていて、その人の手配で一緒に連れて行つてやるといわれ、復員の兵隊さん達と、一緒に帰りました。約一三時間乗りっぱなしでトイレにもゆかず、その時の辛さは一通りではありませんでした。ようやく上野駅につき、主人が迎えにきてくれていましたので、その時思わず嬉しさと気のゆるみが一度にきて、おいおい泣き伏してしまいました。

全く良く帰宅出来たものだと思議な位でした。再び楽しい家庭が出来ると思い、暫く夢のような日々でした。子供等も喜んで庭をとんで遊んでいました。何をみるにつけても今は想像もつきません。

でもそのころは敗戦だとか、物の不自由なんか全然苦勞でなく、疎開先の苦しさ、悲しさを思う時、何一つ不足なく、自分が丈夫で帰れた事だけが一番嬉しかったです。

これはちょっと別な話になりますが、私どもが疎開したすぐ傍に高井戸第二小学校の生徒が疎開してきました。一日おき位にうちの子供を連れて見にいました。子供が、「おばさん東京」といって足下にくっついてきます。可愛いくて、

自分の子供と一緒に抱いてやりました。親許を離れて一人、どんなに淋しいだろうと一緒に泣きたくなる思いでした。